

川合道雄著『武士のなったキリスト者 押川方義 管見』
(大正・昭和編)

佐藤 泰 正

これは前著「武士のなったキリスト者 押川方義管見（明治編）」に続く「大正・昭和編」だが、押川自身はすでに昭和三年一月に没して居り、社会活動を見る限り、昭和は事実なきにも等しいといえるが、「あえて昭和を付したゆえんは、たとえ肉体の自由は失ったにせよ、彼の内面の劇は停止したとは思えぬからである」という。これはその「あとがき」に言う所だが、この「内面の劇」云々という所に、恐らくは著者の言いがたく深い思いは込められているとみる事が出来よう。

押川方義はいくまでもなく幕末から明治、大正、昭和初期と生き抜いた、文字通りキリスト教界を代表するひとりだが、東北伝道を目指しては仙台神学校を創設。これが後の東北学院となり初代院長。解任後は目をアジアに向け海外教育会を興し、朝鮮に京城学院を設立。さらに実業界に転じては東北、北海道の鉱山発掘や北樺太油田開発などにもかかわるが失敗。さらに憲政会代議士として政界にも進出するが志ならず、引退後は不遇孤独の晩年を迎える。この間の実業界、政界への転進を批判して、正統的信仰から離反して俗界に墮したという非難や誤解は多かったが、彼は

これらの批判に対しては終始黙して語らなかつた。

この生涯の転変をみれば「謎に包まれた大星雲の観」あり、この続篇においても広汎な資料に即して、その謎の核心に迫るほかはないというが、しかし謎はなお謎のままに手つかずに残る。そこで自分は「こうした押川の生涯を勝手ながら読者それぞれの方に問いかけることでこの書を閉じ」るほかはなかつたという。それは「私自身答えるすべを持たぬから」だが、ただ一点「ひたすら自分の目線を第一にこの武士的キリスト者の足跡を追つた」という。

いかにも著者らしい謙抑な言葉だが、しかしその問う所は深い。評伝のかなめとは「内観外察」にあるという。これは前著の書評でも引用した、著者の父君川合山月がその師押川方義を語るにあつたての言葉だが、ことのかなめは、いや困難さはこの所にあろう。「内部の心霊を観察する明」というが、黙してすべてを語らぬ対者をどう捉えるか。要は「其外部の実態を蒐集する精」を尽くすほかはあるまい。こうして前者にも劣らぬ多様な資料が駆使され、そこに浮かび上がって来るのは、ほかならぬ当時の政界をとりまく、哲学なく、理念なき困迷、腐敗の様相であり、それは押川方義という存在を鏡とすることによって、よりあざやかとなる。一方押川自身はどうか。

「我輩の議會入りは政治を議する目的にあらず、議員共に一大説教をなさんが為である」とは押川のいう所だが、しかしその名だたる雄弁も獅子吼も、しばしば議員たちの嘲笑の風にさらされ、「汝政治を知らざるかの冷罵を報いられ、其国体を説き宗教

を論じて、耶蘇教と云ふや満場哄笑す」とは、一部新聞（報知新聞、大六・七・一四）の報ずる所だが、このような場面はしばしば繰り返される所であつた。

「政治の最高形式は聖王賢相が眞の政治を行へば今日の民主思想の精粹も期せずして其中に含まれる」云々とは、その文中に引く『聖雄押川方義』（大塚榮三）の著者の語る所だが、この押川の言葉にふれ、「押川方義の生涯を貫いた中心思想は、〈神政治〉であつた。日本改造論も、日本の救いも、そして後年の押川がそこに身を置くへ一國独立〉の全アジア主義、民族独立運動も、言わばこの〈神政治〉、「神の義」（神義論）をその根底にした〈神政治〉の実行であり、それに向けての努力であつた」とは、同じく文中に引く『押川方義』——そのナショナリズムを背景として——の著者藤一也の言う所だが、押川の政治思想の核心を衝くものであろう。

これらの指摘に対し著者川合道雄の説く所はどうか。禁欲的というか、その私見を語る所は殆どないが、ただ一ヶ所、あえて押川の弱点、その負性を衝く鋭い批判がみられる。当時神道系の行者で、所謂、予言で信者を集め、政財界の有力者にもとり入り、文字通り「日本のラスプーチン」とも呼ばれた飯野吉三郎なる人物が起こした恐喝事件の弁護人として、押川が例のごとく熱弁をふるつて擁護した件に関したくだりだが、著者はこれを批判して次のごとく言う。

彼は「飯野の掲げる理想（愛国主義や敬神）そのものに深く共鳴したが故に、その一点で飯野を弁護したのかもしれない。」「その

胸裡には強烈な信念、信仰に支えられた使命感を燃え立たせていた。世評を度外視し得たのもその故」で、「そういう目でのみ飯野を見ていたのかもしれない」ぬが、それは「己れ自身の投影としての信頼」であり、そこに「熱い共感はあるとしても現実を凝視する覚めた視点は生まれない。」「押川の生涯を通じての事業の失敗もそうした理想と現実のギャップにあつたものでは」ないか。これは「彼が名だたる雄弁の士であつても、文筆の人ではなかつた」こととも無縁ではあるまい。「彼は熱烈な己れの理想・信念を文字通り声涙共に下る弁護で訴えたが、その所懐を直接詞藻に託して表現したことはほとんどなかつた。自己即絶対——といわぬまでも、常に絶対者と共にあると感じる強烈な信念（信仰）は、直情の口外に噴出するにまかせれば足り、想を文筆に煩わす必要はなかつた故に違ひない。だが同時にそこには、書くという作業に不可欠な相対的な視点——冷徹な現実の認識も、もともと存在し得なかつたとも言ひ得よう」という。

いささか長い引用となつたが、ここに著者の批判のすべてはあつた。「自己即絶対」といわぬまでも云々とは、その純一な自己の〈信〉、また人間の〈信〉の何たるかを十分に相対化する視点をもちえなかつたあやうさを、そこに見るということであらう。ここには著者自身をもつらぬく〈信〉なるものへの根源的な問いがかいま見られる。いま筆者の手許に「押川先生聖書講義」（昭六・三、誠修学院編輯部発行）なる一書がある。明治二十六年二月、東北学院神学部に入學した川合信水が、その師押川の講義、また仙台日本キリスト教会における説教を書きとめたものだが、特にそ

の神学部の講義にあつては学生一同「或は沈黙し、或は反省し、或は落涙し、以つて時の移るを覚えざりき」というごとく、押川の熱情は若い学徒たちの純朴な心にはしみ亘るものがあつたと思われる。

この川合信水の押川への深い信徒の姿は、両者の書簡（押川方義・川合信水両先生往復書簡集）昭五六・一一、基督心宗教団事務局出版部）をめぐつても明らかである。また先にも引いた『聖雄押川方義』の語る所にもその題名通り、まだ知られず、誰もその全貌に触れることなき押川について語ると言いつつ、その真情は別として、語る所はやや一面的な弁疏、賞揚にとどまるというほかはない。これに対し藤一也の前掲の一書はその副題も示すごとく、明治の革命以来「西欧の衝撃」のもと、ナショナルなものとインターナショナルなものとの闘争の中で、押川方義ほど「政治と宗教、国家や民族の問題で苦闘したキリスト者も珍しく、いまその軌跡の一斑を問うてみたいという言葉通り、広汎な情報、資料を使ひつつ明快にその行跡を追つてみせたものであり、本書の著者川合氏もまたこれら先行の著作を視野に入れつつ自在に語りつつあるが、しかしその記述の姿勢にはどこか醒めた所があり、この謎多き独自の人物の言動、言説をめぐつて、一種自在な文士の散策を試みてるとさえみえる所がある。政界入り以来の押川が信念をもつて説けば説くほど罵詈、嘲笑の的となる。そこにドン・キホーテの奮闘にも比すべき孤高な主人公の姿がみえるが、どうやら著者の眼は、この一箇独自の人物をこのように生かしめ、導いたこの近代日本のエートス、その根源にあるものは何

かと問いたげである。その普選運動その他の局面における押川の行動は目覚しく、見るべきものは多いが、なおかつその孤影の辿る所は何か。先にも引いた晩期引退の押川の無言の胸中を探つて、その魂のドラマは終わつていないはずだという。

押川の憂慮した（国難）はやがて満州事変勃発以後の急激な時代の変転となつて押し寄せて来る。押川はこの続きを知らずして世を去つたことはせめてもの幸せというべきだが、自分は「そうした晩年の押川の心事に立ち入ることを避けた」。それは「そこに最も関心を持つが故に軽率にふれ得なかつた」故だという。ここにも著者の押川を語る心意の揺れはみられるが、この「あとがき」のなかばに、二・二六事件当日の状況を眼のあたりに見た、著者の見聞の一端が語られており、著者の同期のひとりとしてこの時期に接した筆者にとつてもまた、この感慨は軽からぬものがある。謎はなお解けぬ、答えは読者各自に託すとは著者のいう所だが、（武士的キリスト者）という一語をめぐるナショナルリズムとキリスト教の問題は、なお解きえざる課題として我々の胸に残る。

今時、世界の状況は全く不透明であり、東西、南北をめぐる民族、宗教の対立は深い。この時、本書の問いかけるものは決して軽くはあるまい。なお巻末には押川と深いかかわりのあつた「斎藤壬生雄覚え書き」や、嶺本善治宛書簡ほか貴重な資料の収録もある。とまれ、前著よりさらに十年、この労作の刊行を心よりの喜びとするものである。